

# 親和会 会報

白坊隆書

27号

2011. 8



## 総会・懇親会のご案内

東日本大震災の後、節電の中の暑い夏を、会員の皆様はいかがお過ごしですか。本年も恒例となりました年に一度の親和会総会・懇親会のご案内を差し上げる季節となりました。

会場を本郷キャンパスに戻して3年目になりましたが、今年は会場の都合で例年より1カ月ほど早い開催となりました。現在の工学部化学・生命系三学科・専攻の近況のご報告のほか、親和会会員の皆様に旧交を温めていただくための様々な企画を用意させていただきました。この企画は下記の運営幹事が中心となっておりますが、今年は本郷キャンパス内にあるグルメの紹介や、大震災時のキャンパスの状況、キャンパス内の最新の建物の状況などを映像を通してご紹介したいと思います。お帰りには映像を記録したDVDの提供も考えております。なお、今年から参加費の大幅な低減を行いましたので、幹事一同、皆様のお越しを心よりお待ちしております。

参加費のお支払いについては当日の会計の手間を少なくするために、できるだけ前納していただくようお願いいたします。なお年会費が未納の方は年間を通じて受け付けておりますので、よろしくご協力のほどお願いいたします。

## 第160回親和会 総会・懇親会開催

日時：10月1日（土） 16：00～18：00

場所：東京大学本郷キャンパス 山上会館 地階 御殿

参加費：前納 5,000円（同封の振込用紙をご利用下さい）

当日 7,000円

☆昭和33年以前ご卒業 前納 3,000円

当日 4,000円

運営幹事：昭和61年卒・平成8年卒

アトラクション：「まいうー本郷キャンパス」

ホームページアンド参加者情報：URL <http://www.chem.t.u-tokyo.ac.jp/shinna/>

### 今回幹事



西片門 正門 本郷通り 山上会館 赤門

### 年会費納入の お願い

平成23年度分  
2,000円

親和会の財政基盤は皆様の会費によって賄われておりますので、今年度未払の方は下記ゆうちょ銀行振込み口座番号に払込み下さい。

00160-2-29506

収入の部	平成21年度繰越金	3,228,435
	年会費	1,905,160
	寄付	17,640
	利息	1,217
	第157回親和会余剰金	417,035
合計	5,569,487	

支出の部	会報印刷費	476,875
	通信費(会報送料+郵便料)	805,980
	親和会組織化費	52,000
	事務局運営費	1,503,413
	(経常経費+事務局経費+事務局員費)	
合計	2,838,268	

繰越金	2,731,219
-----	-----------

### 平成22年度会計報告

### 総会議案

#### ◆理事退任の件

- 徳本 恒徳(昭和44年燃料工学科卒)
- 杉山 健一(昭和44年化学工学科卒)
- 西郷 和彦(昭和44年東工大卒)
- 上野 徹(昭和45年化学工学科卒)
- 佐々木 登(昭和46年工業化学科卒)

## 親和会会長就任にあたり

伊藤 東 (昭和41年卒)  
(電気化学工業株) 特別顧問



「親和会」の名に親しみを感じて居り、加治前会長の後任として親和会の会長をお引き受けす

ることに致しました。

昭和43年に「親睦会」の院生親和会の会長を務めました。「東大闘争」の時期です。院生親和会が学生の意見集約の場となり、教授会(鶴田先生が4学科の代表)との「話し合い集会」が連日も持たれ、先生・学生の意思疎通を図る中、5号館は外部からの「封鎖」を防止し、自治が維持されました。

駒場から本郷に移動した昭和39年に、5号館の竣工式が地下の実験室でありました。学部学生も出席可と言うことで、大いに飲食を楽しんだ覚えがあります。祝辞の中で建設に当たり応用化学の諸先輩の尽力が披露されました。現在計画中の新3号館へ、5号館の主要な機能が移る予定と聞いております。

昨年の「根岸先生のノーベル化学賞」や最近の「化学産業の時代」の出版など、化学の素材・部材で日本の強さが認められておりますが、親和会メンバーの活躍

が大いに寄与していると思われれます。今後も日本の産業だけでなく世界の化学品の先導役を期待致します。

この様な状況で親和会は機能を強化したい。第一に「会員の親睦」です。先輩・後輩の交流も重要ですが、同期・同学科の「仲間交流」も大変楽しみなことです。親和会総会は早い時間に終了とし、終了後の「仲間交流」を想定致しております。また、学年幹事の設定を進めていきますが、更に「同期の学科別・コース別」に幹事を決めると「仲間交流」は促進されます。第二は応用化学系(含、バイオ系)の「現役世代への寄与」です。現5号館の建設にはOBの支援がありました。新3号館への移動等にて何らかの支援・手助けが出来ると思いますので、今後検討して行きたい。第三は産・学・官で活躍する親和会メンバーによる「技術開発への活用」です。親和会会員間の交流とネットワーク強化により、親和会名簿などに記載されている企業別・勤務先別等の情報を活用して頂きたい。事前に多少の脈がある、このネットワークは活用し易いので、親和会総会に出席し多くの知人・知遇を得て下さい。

事務局は大久保事務局長、佗美事務局員の新体制に成りました。親和会を有意義なOB会活動の場に致しましょう。



## 親和会副会長に就任するに当たって

安井 至 (昭和43年卒)  
(製品評価技術基盤機構) 理事長



応用化学系を卒業したとは言っても、山口悟郎先生の応用鉱物学講座だったこともあり、化学の本流からは程遠い道を歩んできました。

40歳代半ばには、環境科学に関する文部省の重点領域研究の代表になったこともあり、環境科学という膨大な広がりのできるだけカバーすることが必要となりました。学問の範囲をできるだけ広くすると「雑学屋」になりますが、「これを機会に雑学を極めて見るか」といったノリで、ここ20年近くを過ごしてきたため、応用化学からはますます遠い存在になってしまった自分を認識せざるを得ない状況です。

ところが、今年は世界(国際)化学年で、その統一テーマがChemistry for our future。化学に対する社会の理解増進、若い世代の化学への興味の喚起、などを、日本化学会が中心となって実現することとなっております。

環境科学は、もともとリスク科学ですから、化学に近い分野ですと、化学物質

安全があり、リスクコミュニケーションは非常に重要な要素です。今年は、化学コミュニケーションが重要だと考えて、この面で、何か世界化学年のために貢献すべく、久しぶりに単行書の執筆に挑戦しております。

課題は、「化学者の常識はどうして世間の常識ではないのか」。それを探るには、化学というものがどのように進化してきたかを復習すれば良いのではないか。そのように考えて、アリストテレスの四元素、錬金術、フロギストン説などから、化学者の常識というものを探る作業をやっております。

現時点までに得た部分的な結論は、化学者は、どうやら他の人々とは違う言語を操る集団として特徴付けるのが良いのではないか、ということ。その文字は、元素記号という表意文字であり、その文法は化学結合論ではないか。しかも、方言がかなりあって、有機化学、生化学、触媒化学、無機化学、材料化学などでは、場合によると言葉が通じないこともある。今回、親和会の副会長を務めることは、様々な化学の分野の権威の方々とお話ができるチャンスです。この機会を活用して、化学者という存在に対する環境科学的・文化人類学的な解析をもう少し進めて、親和会の皆様と議論し、交流の一助にしてみたいと思っております。よろしくお願い申し上げます。

# 恩師の想い出

## 私の恩師・根岸英一教授

北海道大学教授 高橋 保  
(触媒化学研究センター(昭和53年卒))



昨年ノーベル化学賞を受賞した根岸英一教授は東大工学部応用化学の出身で学部卒業とともに帝人に就職し、その後米国ペンシルバニア大学で博士号を取得、帝人を退職してパデュー大学のH.C.Brown教授のもとで博士研究を行った。ニューヨーク州のシラキュース大学で助教授のポジションを得てから、その後パデュー大学に教授として戻ってきた。私は5号館で助手をしていたときに、このパデュー大学の根岸先生のところに1984年から2年間留学をした。運の良い事に、この根岸先生が昨年ノーベル化学賞を受賞したのである。それで一気に忙しくなった。

留学のため、初めてインディアナ州ラファイエットにあるパデュー大学に到着したとき、真っ先に根岸先生に言われたことは「これまで2年間で一番論文を出したのはJ. Miller、論文を7報出しています。高橋さん、この記録を破りませんか？」であった。それからの実験は大変で、ガラス器具を午前中の実験に使うも

の、午後の実験に使うもの、夜の実験につかうものの3つのグループに分け、多いときは1日に実験を17個行っていた。実験はスタートして1時間、3時間追跡し、中止するか継続するかの判断を求められた。継続しないと判断したら、すぐに反応液を処理してガラス器具を洗うという作業を行なった。毎日夜中3時ごろまで実験を行っていた。それでも時間が足りないので毎週1回は実験室から家に帰ることは無かった。そうこうしながら、2年間で13報くらい論文を出したので、この根岸先生の最初の期待には応えたことになったと思う。その後ハワイの国際会議で私の後にポスドクで来たM.E.さんに会ったときに、「根岸先生に、これまで2年間で一番論文を出したのは、高橋というポスドクだ。あなたはこの記録を破りませんか？」と言われたよ。えらい迷惑だ。」と言われた。私が作ったこの記録はまだ破られていないと思う。

根岸先生は何事にも徹底している。研究だけでなくゴルフにおいてもそれが言える。通常ゴルフをやる方は18ホールで終了するが、根岸先生は18ホールでは止めない。「高橋さん、もう一回いきましょう。」と言って、18ホール回った後に、また18ホール回るのである。36ホール回り終えて、暗くなっても止めない。「高橋さん、もう一回行きましょう」といって45

ホール回るのである。「根岸先生、暗くてボールが見えませんが…」というとき、「高橋さん、ゴルフは耳でするものです。打った後に耳を澄ましてみると、音でどこに飛んだか分かるでしょ。」と言ってきました。なかなか見つからないボールを探し、探しやっているとさらに暗くなり、真っ暗になってしまつて、根岸先生にも足元にあるボールが全く見えなくなつてしまつた。そうなるかと「高橋さん、そろそろ止めましょうか。」と終わることができた。

日本から根岸先生に電話をするときは、後ろに会議などの用事がないことを確認してから電話をするようにしている。すぐに化学の話になって、電話は必ず1時間以上になるからである。根岸先生のアメリカのご自宅にお邪魔すると、夜8時ごろに夕食が済むとすぐに化学の話になる。この化学の話は永遠に終わらないだろうなと思うくらい続く。翌朝4時過ぎくらいになると、根岸先生が睡魔に勝てなくなつて、「高橋さん、そろそろ寝ましょうか。」とやつと終わるのである。

7年前に私が北海道大学触媒化学研究センターのセンター長になったときに、根岸英一先生や鈴木章先生のノーベル賞を支援する活動を始めた。日本人が講演者で外国人が聴衆。つまり日本人の業績を外国人が聴くというコンセプトでヨーロッパを中心に毎年クロスカップリングのシンポジウムを行なった。最初の年はドイツのアーヘン、次の年がアメリカのラファイエット、フランスのリヨン、スウェーデンのストックホルム、ロシアのモスクワであった。試薬メーカーのアルドリッチの協力を得て、ヨーロッパの1000箇所以上の顧客に、毎年9月ごろ

にシンポジウムの情報を送ってもらっていた。従って毎年10万人以上のヨーロッパの研究者が根岸先生や鈴木章先生の名前で写真とクロスカップリングという言葉を知り、聞いていたことになる。そのうち、根岸先生がノーベル賞の選考委員会で第3段階まで進んだ、とか、下村先生に3票差で敗れたとか、どうやってそういう情報が出てくるのか分からなかつたが、だんだん可能性が高くなつてくる情報があるところから入つてきていた。昨年の6月には文部科学省に、今年ノーベル賞が来る可能性が高いので少し予算を面倒見て欲しいというお願いをしたところ、文部科学省でもそのことが話題となつたと聞いている。

そして昨年は北大の教授会でも、シンポジウムの懇親会でも「今年来る可能性が高い。」と言つていたら10月6日に皆さんがご存知のようにノーベル賞化学賞決定の知らせが入つてきたのである。

ノーベル化学賞受賞決定後根岸先生に会ったときに、「高橋さんのおかげだ。」と根岸先生に握手を求められたのはとてもうれしかった。受賞者は授賞式に14名招待することができることになっている。普通は奥さんや家族を招待するが、根岸先生から電話があつて「招待者のリストの最初に高橋さんの名前を書きたい。」と言つて来られた。実際根岸先生には100名以上のお弟子さんがいるが、お弟子さんの中で招待されたのは私だけであつた。ストックホルムでの根岸先生のノーベル賞受賞講演でも最後の謝辞のところで貢献した人たちのリストを紹介しながら私の名前だけ特別に呼んでもらえたことも一生忘れられない喜びである。

# 温故知新

## 科学者・技術者の責任

合志 陽一（平成10年退官）



今般の東日本大震災は災害自体だけでなく社会への影響という点で前例をみない。地震については、かなり良好に対処し得たようであるが、津波に関してはほとんど無力であった。想定をはるかに超えるような津波であったためとみられている。

関連して発生した原子力発電所の事故は、長期的には、最も深刻なものであり最悪の対処となつてしまった。これらに関して原因究明と対策が開始されているので、その結果をみて判断するのがよいであろうが一市民として、一科学者、一技術者として現時点での個人的判断を述べておくのも無用なことではあるまい。

今後この大震災の原因について、また対処の仕方について徹底した調査・解明が行われることを希望するものである。しかし個別の技術的検討をこえた重要な視点を見失うべきではないと思う。それは、我々科学者・技術者は何に対して責任を持つか、感じるべきであるか、とい

うことである。ごく一般的にいうと、このような原因究明の公的委員会は推進側と反対側の委員により構成され、ある程度中立的な学識経験者が加わって作業をすすめる。その人選の内幕は想像以上に激しい。結果として、あらかじめ予想される結論にあう人選が行われ議論は予想された結論に合わせて展開していくことが多い。予断のないゼロベースから取組む委員会も多いことは事実であろうが、利害関係者から見れば、とてもそのようなナイーブな取組はしていられないというのが正直なところであろう。

さて、ここで考えなければならぬのは、このような判断作業にかかわるメンバーは本来、何に対して責任を感じて行動すべきかということである。一般論でいえば科学者・技術者としての良心にしたがつて行動すべしということになる。

しかし、委員選定の過程からもあきらかなよう、利害関係者、具体的には支持団体、所属機関の意向を考えて行動することになる。ところが、科学者・技術者としての良心にもとづく行動と利害関係者として、あるいはその代弁者としての行動は一致するとは限らない。教科書的には、科学者・技術者としての良心にもとづく行動をはっきり要請しているが、それが現実世界の利害に近づくほど判断は難しくなる。安全性の評価、経済性の評価などいづれも容易ではない。

それにしても、大災害の原因究明のような重要な問題が利害関係のぶつけ合いといった力づくの議論で処理されて良いものであろうか。立场上大きな工事の起

工式に立会うことが何回かあった。このような式では神官をまねき、安全祈願の式をとり行うことが多い。かなり形式化しており、工事会社によっては、このような儀式担当の役職があり、次々と式典をこなしているときもきく。しかし、形式化しているとはいえ、やはり厳粛な瞬間であり、関係者は工事の無事を祈願することになる。この時我々は何に對し責任を感じて祈願しているのだろうか。利害関係者ではないであろう。工事の発注者、受注者でもないであろう。○神社の神官でもない。何か、それらを越えた存在に對して工事の安全を祈願する。それが何かは難しい。形式的には神にということであろうが形式論ではない。實質的にしかし肅然として祈る対象のことである。その何者かに對して責任を感じつつ工事の無事を祈る。

工事の安全祈願にとどまらず科学者・技術者の行動規範を論ずるとき我々は何に對して責任を感じて行動すべきかを明示的に表明する必要がある。どの時代にも論じられておりながらよく見えないのは現代の混迷の表れかもしれない。この小文で強調したい「科学者・技術者は公に對して責任をもつて行動すべきである」と。さらに世論が形成される過程での学会活動による自由な議論が我々の方向を正しく導く方策であることも強調したい。学界や技術者の協会での自由な議論はこの点から必要不可欠でありそれをすすめることは我々の義務である。

## 編集後記

5月より親和会の事務局員を務めることになりました佐美次彦です。今日までは5号館の秘書をされていた方が事務局を担当されてきましたが、長年貢献されていた近藤様様が退任されることになったのをきっかけに、今後は親和会の会員の中で、事務局の運営をすることが望ましいということになりました。たまたま、今年から会長となった伊藤東さんの同期であるということから、その役をお引き受けすることになりました。

事務局を担当してからもう3カ月がたちましたので、すこしわかってきたこともあります。会員総数はお亡くなりになった方を除くと約9000人の大所帯です。そのうち2600の方が住所不明で、会員の3割に相当します。これをできるだけ少なくしていきたいと思えます。しかし、事務局だけでは到底不可能ですので、皆さんのご協力を得て達成していきたいと思っております。

また、今まではお支払いが郵便口座だけでしたが、今後はコンビニなどでも支払いができるような改善を進めたいと思っております。またインターネットを有効に使うことも積極的に進めたいと思っておりますので、何卒よろしくお願いたします。

（記）佐美次彦

## 事務局のご案内

〒113-8656  
東京都文京区本郷7-3-1  
東京大学工学部5号館1階152号室  
TEL/FAX: 03-5841-7400  
E-Mail: shinna@chem.t.u-tokyo.ac.jp

事務担当者 佐美 次彦